

第3巻「音韻論」演習問題の解答と解説

2014.7.16 初版 2014.9.17 第2版

●第1章

1.

〔問題〕

ある日本人英語学習者が発音練習のため、英語の単語が録音された CD を聞き、発音練習をした。以下は、その学習者が発音した単語を聞き、そのまま音声記号で書き取ったものである。それぞれ何という単語のつもりで発音したものか考えなさい。なお、CD の音声は一般米語 (GA) とする。複数の単語が当てはまる場合があることに注意。

- | | |
|-----------|----------|
| a. [sai] | d. [kab] |
| b. [ho:l] | e. [bat] |
| c. [rid] | |

〔解答〕

この問題は、発音練習を行ったこの英語学習者が日本語の音で英語を発音している、すなわち日本語訛りの英語発音になっていると考えられる。

- a. [sai] — “sigh”/saɪ/もしくは“thigh”/θaɪ/. 日本語には/s/-/θ/の対立がないので、“sigh”と“thigh”は日本語訛りの発音では区別ができない。
- b. [ho:l] — “hall”/hɔ:l/もしくは“hole”/hoʊl/. /ɔ/と/ou/の区別は日本語母語話者にとっては最も難しいものの1つである。
- c. [rid] — “lid”/lɪd/もしくは“rid”/ɹɪd/. /l/と/ɹ/という、最もよく知られる日本語母語話者には難しい音の区別である。
- d. [kab] — “cab”/kæb/, “cub”/kʌb/, “cob”/kɒb/のいずれかの可能性が高い。日本語の「ア」に聞こえる英語の母音は最も数が多く、区別が難しい。加えて、他の可能性としては“curb”/kɜ:b/, “carb”/kɑrb/, “curve”/kɜ:v/, “carve”/kɑrv/も考えられる。英語では長さは母音の区別にとって本質的ではないので、CD の音声が多少短く発音されていれば、日本語母語話者としては短く聞こえてもおかしくない。ただ、通常であれば/kɜ:b/, /kɑrb/, /kɜ:v/, /kɑrv/は日本語母語話者の耳には日本

語でいう長母音に聞こえるのが普通である。

- e. [bat] — “bat”/bæt/, “but”/bʌt/, “bot”/bɒt/, “bought”/bɔ:t/のいずれかである。日本語母語話者には区別の難しいア系の母音である。“bot” /bɒt/と“bought” /bɔ:t/は、日本語母語話者の耳には[bɑ:t]と知覚される場合もあるが、直後が無声音の場合母音は短く発音されるので、[bat]と聞かれる可能性も十分にある。

2.

〔問題〕

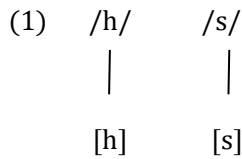
以下の日本語のデータは東京の下町方言（江戸っ子弁）の母語話者のものである。このデータを見て、[h]と[j]と[s]がどのような関係にあるかを説明しなさい。

- | | | | |
|--------------|-----|-------------|--------|
| a. [asʊ] | 明日 | g. [onso] | 音素 |
| b. [ʃimitsʊ] | 秘密 | h. [saka] | 坂 |
| c. [haka] | 墓 | i. [ʃʃitsʊ] | (大脳)皮質 |
| d. [ʃʃitsʊ] | 資質 | j. [bihaku] | 美白 |
| e. [asemo] | あせも | k. [hori] | 堀 |
| f. [ahen] | アヘン | l. [semi] | セミ |

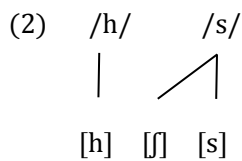
〔解答〕

これは典型的な中和の例である。中和とは、他では保たれている音の対立が、ある音声環境においてのみ失われることを指す。このデータの場合、ハ行子音の/h/とサ行子音の/s/はほとんどの場合区別があるのだが、日本語の下町方言ではハ行のイ段の子音が[j]で発音されている。これは、直後に/i/が続く場合にのみ、サ行でもハ行でも[j]という異音となって発音され、対立がなくなっているということである。以下に詳しく説明する。

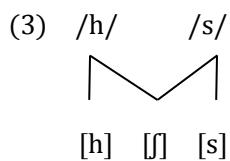
まず、ハ行子音の/h/とサ行子音の/s/は通常ははっきりと区別される子音どうし、つまり別々の音素どうしである。なぜかと言えば、[hakai] (破壊) vs. [sakai] (境), [hahe:] (派兵) vs. [hase:] (不正), [ho:tai] (包帯) vs. [so:tai] (早退) のようなミニマルペアが見つかるからである。[h]と[s]の間にミニマルペアが見つかるということは、これら二つの音は対立分布の関係にあるということであり、ゆえに別々の音素の異音である。これを図示すると以下のようなになる。



次に、上の言語データ中の [ʔiʔitsuu] (資質) にも見られるように、サ行には [s] の他に [ʔ] という音も使われている。この [ʔ] は必ず直後が /i/ であり、その他の母音の時には [s] が現れている。ということは [s] と [ʔ] は相補分布の関係にあるということになる。したがって、サ行において、[s] と [ʔ] は同じ音素の異音どうしである。これを (1) に重ねて表わすと以下のようになる。



さらに、下町方言においては、サ行における [s] と [ʔ] と同じ関係が [h] と [ʔ] の間に見られる。下町方言では、ハ行イ段は [i] であるから、[h] はイ段以外の母音が後続する場合に現れ、[ʔ] は直後に [i] が続くときのみ現れる。これは [h] と [ʔ] が相補分布の関係にあるということであり、これら二つの音は同じ音素の異音である。この関係を (2) に重ねて示したのが (3) である。



(3) から分かることは、[ʔ] という異音が二つの音素 /h/ と /s/ の共通の異音として機能しているということであり、これはすなわち、/h/ と /s/ の対立が中和しているということである。

3.

〔問題〕

以下の言語資料はカナダ英語からのものである。[aɪ] と [əɪ] の分布について観察し、その音韻変化の規則を、音韻素性を使って書き表しなさい (本文内の (19) を参照)。

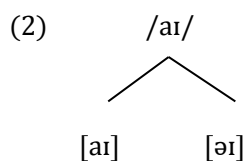
- | | | | |
|-----------|-------|------------|-------|
| a. [nəɪs] | nice | h. [mɔɪt] | might |
| b. [naɪl] | Nile | i. [naɪn] | ninth |
| c. [kɹaɪ] | cry | j. [fɑɪt] | fight |
| d. [lɑɪt] | light | k. [faɪə:] | fire |
| e. [ɹaɪd] | ride | l. [maɪm] | mime |
| f. [ɹaɪz] | rise | m. [baɪt] | bite |
| g. [aɪs] | ice | n. [aɪs] | rice |

【解答】

上の言語データから[ai]および[əɪ]が現れる音声環境をそれぞれリストにして示したのが(1)である。アンダーバーは[ai]もしくは[əɪ]が現れる位置を、「#」は語境界を示す。

- | | | |
|-----|-----------|----------|
| (1) | [ai] | [əɪ] |
| | b.[n__l] | a.[n__s] |
| | c.[ɹ__#] | d.[l__t] |
| | e.[ɹ__d] | g.[#__s] |
| | f.[ɹ__z] | h.[m__t] |
| | i.[n__n] | j.[f__t] |
| | k.[f__ə:] | m.[b__t] |
| | l.[m__m] | n.[ɹ__s] |

このリストから分かることは、[əɪ]が生じるときには、いつも直後に子音がありかつその子音が無声音であるということである。逆に[ai]が生じるときには直後は何もないかもしくは有声音である。したがって、[ai]と[əɪ]は相補分布の関係にあることが分かる。相補分布の関係にあるということは、[ai]と[əɪ]は同じ音素の異音であるので、これら2音の関係は以下のように図示できる。



このような関係は、音変化としては音素/aɪ/が直後に無声子音が続くときに異音[əɪ]とな

ると考えることができる。無声子音は音韻素性を使えば，[-有声性]のみで表現できる。英語では有声・無声の区別があるのは阻害音だけだが，阻害音を特定するために[+子音性]や[-共鳴性]といった素性は不要である。なぜなら，そもそも阻害音以外は母音も含めてすべて有声音であり，それらの分節音にとっては，[±有声性]はいわば余計な(「余剰的である(redundant)」という)音韻素性であるからである。また/aɪ/→[əɪ]の変化は，音韻素性を使えば，二重母音の出だしが[+低, +前]から[-低, -前]への変化と考えられる。

以上をまとめて音韻素性を使った音韻規則として記述すると以下のようになる。

- (3) カナダ英語において，[+低, +前]を持つ分節音は，直後に[-有声性]を持つ分節音があるとき，[-低, -前]へと変化する。

● 第 2 章

1.

〔問題〕

英語で書かれた歌詞をみて、韻を調べなさい。

〔解答〕

解答例

“Wild Heart” by The Vamps
I was walking away, [ei]
But she’ s so beautiful it made me stay[ei]
I don’ t know her name, [eim]
But I’ m hoping she might feel the same[eim]
So here I go again, [ein]
She got my heart again! [ein]

Tonight we’ ll dance
I’ ll be yours and you’ ll be mine[ain]
We won’ t look back,
Take my hand and we will shine[ain]
Oh, oh, oh
She needs a wild heart[a:rt]
I got a wild heart. [a:rt]

これは The Vamps の Wild Heart という曲です。第 1 スタンザ（初めの 6 行）では、aa, bb, cc という形で 2 行ずつ脚韻を踏んでいます。第 2 スタンザはレフレインです。ここでは、abcbedd という形で脚韻を踏んでいます。

2.

〔問題〕

次の英語と日本語の単語が何音節か、また、各音節が何モーラかを述べなさい。

- a. dove trophy oasis straight bottle immigration
- b. 中国 台湾 北海道 別府 ミャンマー トロント キューバ

〔解答〕

- a. dove (1音節 (2モーラ))
 trophy (2音節: 第1音節 (2モーラ), 第2音節 (1モーラ))
 oasis (3音節: 第1音節 (1モーラ), 第2音節 (2モーラ), 第3音節 (2モーラ))
 straight (1音節3モーラ)
 bottle (2音節: 第1音節 (2モーラ), 第2音節 (1モーラ))
 immigration (4音節: 第1音節 (1モーラ), 第2音節 (2モーラ), 第3音節 (2モーラ), 第4音節 (2モーラ))
- b. 中国 (3音節: 第1音節 (2モーラ) 第2音節 (1モーラ) 第3音節 (1モーラ))
 台湾 (2音節: 第1音節 (2モーラ) 第2音節 (2モーラ))
 北海道 (3音節: 第1音節 (2モーラ) 第2音節 (2モーラ) 第3音節 (2モーラ))
 別府 (2音節: 第1音節 (2モーラ) 第2音節 (1モーラ))
 ミャンマー (2音節: 第1音節 (2モーラ) 第2音節 (2モーラ))
 トロント (3音節: 第1音節 (1モーラ) 第2音節 (2モーラ) 第3音節 (1モーラ))
 キューバ (2音節: 第1音節 (2モーラ) 第2音節 (1モーラ))
 アルゼンチン (4音節: 第1音節 (1モーラ) 第2音節 (1モーラ) 第3音節 (2モーラ) 第4音節 (2モーラ))

3.

【問題】

「パソコン」(パーソナルコンピューター), 「レスカ」(レモンスカッシュ)など, 日本語の複合語からの短縮語を調べて, もとになった複合語の各構成要素から何モーラをとって短縮語を形成しているかを調査しなさい. 例えば, 「パソコン」では, 「パーソナル」から2モーラ, 「コンピューター」から2モーラをとり, 2モーラ+2モーラの短縮語を形成している. 調査をもとにして, 1モーラ+1モーラの短縮語は存在するかどうかなど, モーラ数に関わる制約を考えなさい.

【解答】

2語からなる複合語の短縮語では, 原則として複合語を形成する各語の左端から2モーラづつとって2モーラ+2モーラの短縮語を形成する. たとえば「ファミレス」(「ファミリー」+「レストラン」)や「ヘビメタ」(「ヘビー」+「メタル」)の下線部をみると, 各語の左端の2モーラが取り出されて短縮語を形成している. さらに短縮語を調べると, なかには「ファミマ」(「ファミリー」+「マート」)など, 2モーラ+1モーラのものもある. しかし, 1モーラ+2モーラのものはない. 「レスカ」(「レモン」+「スカッシュ」)や「テ

レコ」(「テープ」+「レコーダー」)は例外的である。辞書を調査すると、1モーラ+1モーラの短縮語は存在しないことが分かる。

なぜ、[2+2]、[2+1]がほとんどで、[1+1]や[1+2]はないのだろうか。この理由は、日本語の複合語短縮語では、複合語を構成するはじめの単語(「ファミレス」の場合は「ファミリー」)から2モーラ、すなわち1フットを短縮語にとりいれなければいけないという制約があるためと考えられている。

では、なぜこのような制約があるのだろうか。それは語のはじめに2モーラのフットをもつ構造が、日本語として好ましいリズム構造であることによる。「パソコン」「ファミ+マ」は好ましいリズム構造だが、短縮語のはじめに1モーラがくる「パ+コン」や「ファ+マ」は好ましくない構造である。日本語が2モーラの結合を1つのフットとしてリズムの基本としており、フットが左にくる構造をリズムカルな好ましい構造とする言語だということが分かる。

参考図書

Ito, Kitagawa, and Mester(1996) "Prosodic Faithfulness and Correspondence: Evidence from a Japanese Argot," *Journal of East Asian Linguistics* 5, 217-294.

桑本裕二(1998) 「日本語における複合語略語の音韻構造」日本音韻論学会編『音韻研究』1: 161-168.

4.

【問題】

本文(21)にあるような英語の人名や普通名詞の短縮形の事例を挙げ、その音節構造を調べなさい。

【解答】

人名

Abraham ⇒ Abe/eɪb/(1音節)

Catherine ⇒ Cate/ Cathy (1音節)/ (1音節+yで2音節)

Diana ⇒ Di/dai/(1音節)

Eugene ⇒ Gene/ɔːdʒi:n/(1音節)

普通名詞

professional ⇒ pro /prɒʃ/(1音節)

honey ⇒ hun/hʌni/(1音節)

dormitory ⇒ dorm(1音節)

●第3章

1.

〔問題〕

日本語の標準語で、次の助詞や形態素が名詞についたとき、どのようなパターンが生じるだろうか。いくつか例をあげて考えなさい。

- a. から b. らしい (e.g.男らしい) c. など d. 市 e. 色 (いろ)

〔解答〕

- a. から 無アクセント

「い’のちから」などアクセントのある語基のアクセントを保持し、「さくらから」など無アクセントの語基にアクセントを生じさせない。

- b. らしい 優勢アクセント

「にほんじ’ん」から「にほんじんらし’い」など、アクセント語に付加しても自身にアクセントを移動する。

- c. など 劣勢アクセント

「い’のち」などのアクセントのある語基に付加して「い’のちなど」とそのアクセントを保持し、「さくら」などの無アクセントの語基に付加して「さくらな’ど」とアクセントを生じさせる。

- d. 市 優勢の直前アクセント

「こ’うべ」に付加して「こ’うべ’し」, 「はこだて (は)」に付加して「はこだて’し」など、どのような語に付加しても直前にアクセントを与える。

- e. 色 優勢の無アクセント

「さくさ」に付加して「さくらいろ」, 「むら’さき」に付加して「むらさきいろ」など、どのような語に付加しても無アクセントである。

2.

〔問題〕

次の各語を音節にわけ、韻脚を用いて強勢パターンを示しなさい。またそれぞれの語の(1) 韻律外性、(2) 強勢転移について、その適用・不適用を分析しなさい。できるだけ分析に理屈付け(説明)も行うこと。

- a. ellipsis b. serenade c. hospital d. determine
e. correct f. Pakistan g. potato

〔解答〕

- a. el. (líp.)<sis> 音節の韻律外性の適用を受ける
語末から2音節目の重音節が強勢を持っている。子音の韻律外性でも説明可能ではあるが、子音を韻律外とするパターンは有標である。なお語頭の音節は綴り上は /l/ が二重子音となっているが、音声実現としては一つの子音で2番めの音節の頭子音となっている。
- b. (sè.re.)(ná)<de> 強勢転移の適用を受けない
最終音節に主強勢がある。
- c. (hós.pi.)<tal> 音節の韻律外性の適用を受ける
後ろから2番目に軽音節があり、後ろから3番目の音節が強勢を持つ、典型的な名詞の強勢パターンである。
- d. de.(tér.mi)<ne> 子音の韻律外性の適用を受ける
語末に子音が一つしかなく、後ろから2番目の音節に主強勢がある、典型的な動詞の強勢パターンである。
- e. cor.(réc)<t> 子音の韻律外性の適用を受ける
語末に子音が二つあり、最終音節に主強勢がある、やはり典型的な形容詞の強勢パターンである。
- f. (Pá.kis.)(tàn) 強転移の適用を受ける
後ろから2番めが重音節で、後ろから3番目の音節に主強勢が転移している。なお /s/ は語中では頭子音にはならず末尾子音となる。強勢転移の適用を受けない発音もある。
- g. po.(tá.)(tò) 弱転移の適用を受ける
後ろから2番めが重音節で、そこに強勢が転移している。語末が二重母音であって曖昧母音化していないことから第2強勢があることがわかる。

3.

【問題】

英語の次の接尾辞が付く単語をある程度集め、その接尾辞が全体的にどのようなパターンを示すか、問題2と同様に分析しなさい。

- a. -esque
- b. -ane (propane など化合物を作る)
- c. -ive (ただし、-ative で終わるものは除いて考えること)

【解答】

- a. -esque 強勢転移の適用を受けない

picturésque, Ròmanésque など、最終音節に主強勢がある語がほとんど。

b. -ane 弱転移の適用を受ける

àdamántàne, elástàne など、後ろから2番めの重音節に主強勢が轉移している語が多い。最終音節は二重母音であることから第2強勢があることがわかる。

c. -ive 音節の韻律外性の適用を受ける

génitive, fúgitive など、後ろから2番めに軽音節があり3番目に主強勢がある語が多い。

4.

〔問題〕

日本語でも音節に基づいてアクセント付与が行われているとする研究者もあり、窪菌は次のようなアクセント規則を仮定している(Kubozono 1996)。

(i) 最後から2番目の音節が重音節ならそこに、軽音節ならもう一つ前にアクセントを与えよ。

これは英語の強勢付与と同じシステムである。モーラのほとんどは普通の軽音節なので、これはモーラに基づくシステムとほぼ同じ予測をするが、一部で異なる予測をする。以下の語末に可能な音節構造ごとに、モーラのシステムと音節のシステムでそれぞれどのようなパターンを予測をするか考えなさい。

(ii) 論理的に可能な語末4モーラの音節構造 (L: 軽音節; H: 重音節)

...LLLL ...LLH ...LHL ...HLL ...HH

さらにこれらの音節構造に当てはまる語を実際に集め、どちらの予測に従ったものが多いか調べなさい (ただし、外来語で元の単語のアクセントを保持する語や、形態素境界を間に含む語はなるべく除くこと)。

〔解答〕

(略)

→集められた語によって、結果が異なることがあるかもしれません。いろいろな語のデータを集めて、それぞれで結論を出して議論してみてください。

●第4章

1.

〔問題〕

レベル I とレベル II の語彙レベルの順序づけを提唱する音韻理論にとって、語幹 (grammatical) に二つの接辞 (un-と-ity) が付加されている ungrammaticality という語は、どのように問題となるか考えなさい。

〔解答〕

4.1.1 項でも解説したように、接頭辞 un-の付加先は形容詞語幹 (もしくは動詞語幹) でなければならない。このように、接辞には、それぞれ結びつくことができる形態素の品詞が指定されており、それを接辞の下位範疇化 (subcategorization) と呼ぶことにする。この接頭辞-un の下位範疇化に基づき、ungrammaticality は形態論的には以下の構造を持っていると考えられる。

(a) [[un-grammatical]-ity]

しかしながら本章の 4.1.3 項で紹介した語彙音韻論の語彙レベルの順序付けの仮説に従えば、接頭辞 un-はクラス II 接辞であり接尾辞-ity はクラス I 接辞なので、レベル I で-ity が形容詞語幹 grammatical に付加されて名詞語幹 grammaticality を形成した後に、レベル II で un-がその名詞語幹に付加されるということになってしまい、上記の un-の下位範疇化および(a)の形態的階層構造と矛盾することになる。これを以下に示す。

(b) [un_n- [grammatical-ity]]

この形態的な下位範疇化による構造(a)とレベル順序付けによる構造(b)のくい違いは、「括弧づけのパラドックス (bracketing paradox)」と呼ばれている。

後者の(b)の構造は、単にクラス I 接辞とクラス II 接辞の付加の順序付けによって導き出されるだけでなく、実際の音韻的・音声学的事実からも裏付けられた構造である。まず、un-と grammatical との間には、韻脚境界のみならず音韻語の境界が存在していると考えられる。というのも英語では、同じ韻脚内で鼻音と軟口蓋音とが隣り合わせの language, Bangor のような場合に、鼻音は義務的に ŋ になる。しかしながら、ungrammatical の場合は、そのような義務的な軟口蓋音化が起こらない。すなわち強勢を担う un-と直後の無強勢音節の gra との間には韻脚境界がある。しかし un は強勢音節 (第二強勢) で gra は無強勢である点を踏まえると、このふたつの音節は同一韻脚内に含まれていても良いはずである。にもかかわらず同一の韻脚に支配されていないということは、このふたつの音節の間により大きな音韻的な境界、すなわち音韻語 (PWd) 境界があり、それがこれら二つの音節がひとつの韻脚を形成することを阻んでいると考えられる (音韻語に関しては第 5 章を参照)。それに対し、grammatical と-ity の間には韻脚境界も音韻語境界もない。-ity が付加されることで、第 1 強勢は語幹の最終母音 a に置かれ、かつ語幹の最終子音 l と接尾辞頭の無強勢母音 i とで音節 li を作っている。よって(b)の構造は、以下のように韻脚および

音韻語 (PWd) という単位を使って書き換えられる.

(b') (<ùn> (gra. <mà.ti.> <cá.li.> ty)_{PWa})_{PWa}

< >は韻脚を示す

形態的下位範疇化に基づく(a)の構造と、音韻的事実によって裏付けられた(b) (もしくは(b'))の構造との矛盾を説明するために、接辞の語幹への付加の順序と音韻的な操作の適用とが一對一で対応しているという考え方、すなわちひとつの接辞が形態部門で付加されるたびに並行して音韻部門での音韻操作も適用されるという語彙音韻論の仮説をいったん白紙に戻してみようとする立場もある。そのひとつは、接辞付加などを伴う形態構造の形成がすべて終了したところで、それをインプットとして用いて、音韻構造へと写像(map)していくという考え方である。この考え方を推し進めると、形態構造から音韻構造に写像される際に、様々な制約を満たす必要があり、形態表示における枝分かれ構造が音韻表示にそのまま忠実に反映されると、それらの制約に違反してしまうなどということも起こり得る。そのような場合には、前者の枝分かれ構造は後者の表示には忠実に反映されず、後者は制約を満たすために前者とは異なる枝分かれ構造を持つことになる。例えばここでは、そのような制約のひとつとして、un-の右端は音韻語境界と接していなければならないという端ぞろえ制約 (alignment constraint) があると考えられる。この端ぞろえ制約を満たすために、たとえ形態構造においては、un-と grammatical の結びつきは強かったとしても、それが音韻構造に写像された時には、その二つの間には大きな音韻語境界が介在するようになってしまうのだ。

2.

【問題】

語彙音韻論の一部には、英語の複合語形成とそれに伴う語彙規則の適用は、クラス II 接辞が付加されるレベル II よりも、さらに上の「レベル III」で行われると提案するものもある。この考え方に照らし合わせると、unself-conscious という語は、どのように問題となるか考えなさい。

【解答】

この問題も上の問題 1 と同じく、「括弧づけのパラドックス」に関する設問である。形態的な下位範疇化に従えば、un-は名詞である self に直接付加することはできず、self-conscious (形容詞) に付加されており、un-の付加に先立って self と conscious は複合形容詞を形成していることになる。それに対し、un-の付加がレベル II で行われ、複合語形成がレベル III で行われるとなると、先に un-が self に付加して、次に unself と conscious が合体すると結論付けなければならなくなってしまう、形態的な下位範疇化に基づく構成素構造との違いが生じてしまう。

3.

〔問題〕

1. 英語の **t** で終わる語幹に、クラス I 接辞の **-ion** が付加されたときに適用される音韻変化について、以下の設問に答えなさい。

(ア) 語幹だけからなる語と派生語とを比較し、派生語ではどのような音韻変化が語幹におこっているか答えなさい。

- | | | | | | |
|------|--------|-----------|-------|-------|----------|
| (i) | act | action | (iii) | opt | option |
| (ii) | except | exception | (iv) | react | reaction |

(イ) 以下の派生語はどれも (ア) の場合と同様に、**t** で終わる語幹に **-ion** が付加されている。

digestion, exhaustion, question, suggestion

これらの語では、(ア)の設問で答えたものと同じ音韻変化はおこっているか、もしも同じでないのなら、どのように異なるのか、またどうして異なる変化をおこすのか、機能的な理由（発音や知覚に基づく理由）を各自考えなさい（ヒント：語幹末音節の尾子音の子音結合）。

〔解答〕

(ア) 派生語では、語幹末の **t**（歯茎破裂音）が **ʃ**（後部歯茎摩擦音）に変化している。

(イ) 上の (ア) のケースとは異なる音韻変化が起こっている。ここでは、語幹末の **t** が摩擦音の **ʃ** ではなく **tʃ**（後部歯茎破擦音）に変化している。ここで取り上げられている例では、語幹末に **s** と **t** の子音結合がある。**s** は摩擦音であり、語幹末の **t** が **ʃ** に変化すると二つの摩擦音（**s** と **ʃ**）が隣り同士になってしまい、発音しにくい状態になる。もともとは、このような発音のしにくい状態を避けるためという機能的理由で、語幹末の **t** は摩擦音の **ʃ** ではなく破擦音の **tʃ** に変化し、それが文法化されたと考えられる。ふたつの似かよった音が隣り合わせになることを禁じる音韻制約については、第 6 章（6.2 節）の(8c)で触れているので参考にしてほしい。

4.

〔問題〕

本文の(15a, b)にあげた複合語の例、すなわち後部要素が動詞から派生した複合語の例で、前部要素が付加詞の場合と内項（目的語）の場合とでは、連濁の有無に違いがあると述べた。では、アクセントのパターンはどうだろうか。これら 2 種類の複合語の例をさらに探し、標準語もしくは自分が母語とする方言において、アクセントのパターンにも違いがあるか観察し、その違いがどのようなものなのか、一般化しなさい（ただし、例外的なものも存在するので、最も強く現れる傾向を一般化しなさい）。

【解答】

この問題の答えは大まかに述べれば「動詞連用形から派生した語を後部要素として持つ複合語は、前部要素が内項のときにアクセント語となり、それが付加詞のときに無アクセントになる傾向が高い」というものである。しかし、後部要素のモーラ数によっては、内項と付加詞の違いはなくなり、どちらもアクセント語となる確率が高くなる。山口京子氏のデータによれば、後部要素が 2 モーラ以下の場合、前部要素が内項であるときに大多数がアクセント語となるのに対し、それが付加詞となると大多数が無アクセント語となっている (Yamaguchi 2011)。ところが後部要素が 3 モーラ以上になると、内項の場合も付加詞の場合もどちらも平均して 90%程度がアクセント語となると報告されている (Yamaguchi 2011)。

● 第 5 章

1.

【問題】

以下の例文で下線の引いてある単一音節機能語のうち，強形で発音されるのはどれか示しなさい。

- (i) He'd like to be what you are now.
- (ii) I do not like what you are eating.
- (iii) Some had left at noon and others had at midnight.
- (iv) They would take more from Suzan than they would from him.
- (v) It's the woman we looking to for help.

【解答】

各例文で強形で発音される機能語を大文字で示す。

- (i) He'd like to be what you ARE now.
- (ii) I do not like what you are eating.
- (iii) Some had left at noon and others HAD at midnight.
- (iv) They would take more from Suzan than they WOULD from him.
- (v) It's the woman we look TO for help.

2.

【問題】

本文では単一音節機能語が後接語である場合を取り上げたが，無強勢であいまい母音を伴った単一音節機能語は，必ずしも内容語の直前に出てくる後接語である場合ばかりとは限らず，代名詞などは文末や句末に生じることでもある。このような場合，韻律構造はどうなっているのか。以下の設問に答えることで，それを考えなさい。

(ア) 以下の(i)~(iii)の r 音挿入の例は，アメリカのマサチューセッツ東部方言の母語話者が許容するものである。ここでは二人称代名詞の you はどれも句末にあるのだが，無強勢のあいまい母音を伴って [jə] と発音されており，その直後に r 音挿入がおこっている。このことから，句末に生じる無強勢の単一音節代名詞の韻律構造について，どのようなことがわかるか答えなさい。

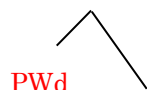
- (i) I see you[jə]-r and ask about it.
- (ii) If I see you[jə]-r, I'll ignore you.
- (iii) I'll see you[jə]-r if I get done on time. (Selkirk 1996)

(イ) 以下の(a)もしくは(b)の PWd 構造は, 上の (ア) の設問での解答と整合性があるか考えなさい. ((b)の構造は, (b')の樹形図に示すように入れ子式になっており, PWd に you [jə]が付加することでさらに大きな PW を形成している.)

(a) [(see you[jə])]_{PWd}

(b) [[(see)_{PWd} you[jə]]]_{PWd}

(b') PWd



see you[jə]

(ウ) もし上記の (イ) の(a)もしくは(b)の PWd 構造を想定することで, (i)~(iii)の r 音挿入を捉えることができるのであれば, (a)と(b)のどちらの構造が適切か考えなさい. (a)と(b)の二つの構造から, 適切なものを選択する際の決め手となる証拠は, 以下の (iv)~(vi)の例のうちどれか示しなさい.

(iv) tell you[jə]

(v) saw-r you[jə]

(vi) saw-r Amanda

【解答】

(ア) 代名詞 you [jə]の右端に, 音韻語 (PWd) の右側境界が存在している. なぜなら, r 音挿入は, 音韻語の右側境界と直後の音との間に起こるから.

(イ) 整合性あり. なぜなら, (a)も(b)もどちらもともに, 音韻語の右側境界が代名詞 you[jə]の右端と共起しているから.

(ウ) (a)と(b)の違いは, 代名詞 you の直前の動詞の右端に音韻語境界があるかないかの違いであると捉えることができる. よって, そのような音韻語境界があるという証拠があれば, (b)が適切であるということになる. そして(v)のデータが (b)の適切性を示す証拠となる. なぜなら(v)では代名詞 you[jə]と直前の saw との間に r 音挿入が起こっており, このことから saw の右端に音韻語の右側境界が存在していることがわかる. それに対し(iv)と(vi)のデータは何の証拠にもならない. まず(iv)では代名詞 you の直前の動詞が子音で終わっているため, その動詞の右端の音韻語境界の有無にかかわらず r 音挿入は不可能である. (vi)のデータでは動詞右端に音韻語境界があることを示しているが, この場合, 動詞の直後に来ているのは内容語であり, それが代名詞 you である場合についての証拠を提示するものではない.

3.

〔問題〕

次の下線部の単語で、リズム規則による強勢移動（弱強反転）が起こるものはどれか
答えなさい

- (i) He gave me [Japanese dolls]_{NP}
- (ii) He gave [the Japanese]_{NP} [dolls]_{NP}
- (iii) Rabbits [reproduce [very quickly]_{AdvP}]_{VP}
- (iv) Rabbits [reproduce [quickly]_{AdvP}]_{VP}

〔解答〕

5.2.2 項の内容に従えば、(i)と(iv)で弱強反転が起こることになる。

●第6章

1.

〔問題〕

以下の(ア)から(ウ)の規則は全て、ある目的もしくは制約に対して共謀関係にある。その目的もしくは制約とはどのようなものか考えなさい。(N=鼻音, T=無声阻害音, D=有声阻害音)

(ア) 鼻音と阻害音の融合 (インドネシア語) $N + T \rightarrow N$

- a. /məN+pilih/ → [məmilih] 'to choose, to vote'
- /məN+tulis/ → [mənulis] 'to write'
- /məN+kasih/ → [məŋasih] 'to give'
- b. /məN+bəli/ → [məmbeli] 'to buy'
- /məN+dapat/ → [məndapat] 'to get, to receive'
- /məN+ganti/ → [məŋganti] 'to change'

(イ) 鼻音の口音化 (マンダ語) $N + T \rightarrow TT$

- a. /maN+tunu/ → [mattunu] 'to burn'
- b. /maN+dundu/ → [mandundu] 'to drink'

(ウ) 阻害音の有声化 (ケチュア語プヨブング方言) $T \rightarrow D / N_$

- a. /kaN+pa/ → [kamba] 'yours'
- /wakiN+ta/ → [wakinda] 'the others'
- b. /sinik·pa/ → [snikpa] 'porcupine's'
- /sača·pi/ → [sačapi] 'in the jungle' (Pater 1999)

〔解答〕

(ア)～(ウ)の音韻規則はどれもN(鼻音)とT(無声阻害音)の並びを、他の音もしくは音配列に変化させているところから、これらの規則は「NTの配列を禁止する制約」、すなわち6.2節の(8b)に挙げたNoNT制約に関して共謀関係にあることがわかる。

2.

〔問題〕

人間の全ての言語に頭子音を持つ音節(CV)が存在すると想定してみよう。さらに本章の表2のデータも参照しながら、以下の制約を設ける必然性があるか考えなさい。

- (ア) NoONSET (頭子音を持つ音節を禁止する有標性制約)
- (イ) NoCOMPLEXCODA (複数の尾子音を禁止する有標性制約)

【解答】

(ア) の NOONSET 制約を設ける必然性はない。なぜなら、すべての言語で頭子音 (onset) を持つ CV の音節構造が許容されるから。もしも NOONSET 制約があるのであれば、その制約が高い位置にランク付けされている言語がありえることとなり、その結果、頭子音を持たない言語が存在する可能性が出てきてしまう。

(イ) の NoCOMPLEXCODA 制約は必要である。なぜなら、6.2 節の表 2 によれば、尾子音の位置で子音結合を許容しない言語が存在するからである。すなわち、このような言語ではたとえインプットで CVCC のような子音結合を尾子音に持つものが与えられても、その子音結合がアウトプットで表層化することを阻止しなければならず、そのためにこの NoCOMPLEXCODA 制約が必要となってくる。

3.

【問題】

以下の (ア) の例に示すように、ビルマ語では、阻害音は声の対立がある (T と D が対立する) が、(イ) の例にあるように母音間では D へ中和する (Smith 2008)。どのような制約のランキングで、このビルマ語の D への中和は捉えることができるか考えなさい (以下の例では音調は省かれている)。

(ア) 語頭での声の対立

poū ‘can’ boum^hu ‘Major’
te ‘hut’ di ‘this’

(イ) 母音間での D への中和

s^hi^hoū ‘oil can’
bou^hde ‘rest house’ (Smith 2008)

【解答】

ビルマ語では T と D とが対立していることから、(a) に示すように忠実性制約である IDENTVOICE が有標性制約 GENERAL である NOD より高い位置にランク付けされているといえる。

(a) 忠実性 (IDENTVOICE) >> 有標性 G (NOD)

しかしながら、母音間では対立が失われて D のみが現れるというところから、(b) に示すように、この忠実性制約よりも上の位置に有標性制約 CONTEXTUAL の NOVTV がランク付けされているという結論が導き出される。

(b) 有標性 c (NOVTV) >> 忠実性 (IDENTVOICE) >> 有標性 G (NOD)